

吉村
昭

私の文学漂流

新潮社

私の文学漂流
吉村昭

新潮社

わたし ぶんがくひまわりゅう
私の文学漂流

一九九二年一月一〇日発行
一九九三年二月一五日四刷

著者 吉村 昭
よしむら てる

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話(営業部) 03-3366-5111

(編集部) 03-3366-5411

振替 東京四一八〇八

印刷 大日本印刷株式会社

製本 大日製本印刷株式会社



© Akira Yoshimura 1992,
Printed in Japan

(乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り)
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

価格はカバーに表示してあります。

ISBN4-10-324222-1 C0095

私の文学漂流 目次

第一章	読書から習作へ	7
第二章	大学文芸部時代	24
第三章	大学中退、結婚、放浪	
第四章	同人雑誌と質店	50
第五章	贖金づくり	63
第六章	「文学者」の復刊	77
第七章	芥川賞候補	90
第八章	二通の白い封筒	103

第九章 睡眠五時間 116

第十章 小説を覗る眼 129

第十一章 会社勤め 143

第十二章 危機 155

第十三章 妻の受賞 168

第十四章 『星への旅』と『戦艦武蔵』

182

第十五章 太宰治賞 194

あとがき 209

私の文学漂流

第一章 読書から習作へ

小学校の三、四年生であった頃、近所に住む東京帝国大学の学生が縊死^{くわし}自殺する出来事が起って、新聞の記事にもなり、町の話題になった。

その日の家族そろった夕食の席で、父が、

「あの帝大生は、むずかしい小説や哲学の本ばかり読んでいたので神経衰弱になり、首を吊ったのだ。妙なものは読まぬ方がいい」と、

と、たしなめるように言った。

私は、そんなものか、と思い、神妙にきいていた。

父は、デパートや寝具店に卸したり鋤山などに納入するふとん綿を製造する工場と綿糸紡績の工場を経営していた。事業一筋で読書の趣味もなかった父は、小説や哲学書を読むことがその学生の精神を異常なものにした、と単純に考えたのだろう。

庭に建っていた六畳一間の離屋はなれに置かれた本棚には、母の好んだ泉鏡花、菊池寛の小説以外に「日の出」「キング」「富士」などの娯楽雑誌や将棋、碁などの本があるだけであった。つまり、私の家には、文学的な雰囲気はなかったのである。

兄たちの中では、三番目の兄英雄が、私が中学校に入る頃から小説に興味をいだいたらしく、芥川賞、直木賞受賞作の単行本などを買って読むようになった。石川達三『蒼氓』、芝木好子『青果の市』、尾崎一雄『暢気眼鏡』、井伏鱒二『ジョン万次郎漂流記』が本棚にあったのを記憶しているし、堤千代『小指』を私も読み、いい小説だな、と思った。

だれでもそうであったように、私は、小学生時代、「幼年倶楽部」からはじまり「少年倶楽部」の江戸川乱歩『怪人二十面相』、山中峯太郎『敵中横断三百里』、高垣眸『怪傑黒頭巾』などの連載小説を愛読し、「譚海」や講談本も読んだ。

私の生家は東京の日暮里町にあって、氏神様である諏方神社すかの鳥居のかたわらに久保田万太郎氏、駅のすぐ上に幸田露伴氏が住んでいて、さらに町内に高名な二人の作家のそれぞれ妾宅があることも知っていた。が、それらの作家も近くに住む画家や書家などと同じようにしか感じられず、なんの関心もいかなかった。

昭和十六年夏、私は同じ町にある私立東京開成中学校の二年生になっていたが、出征していた四番目の兄敬吾が中国戦線で戦死し、太平洋戦争が勃発した十二月八日の二日後に遺骨が帰還した。白木の箱におさめられていた骨には、小石が骨の一部であるかのようにへばり

ついで、私は、兄の遺体が荒涼とした草原で焼かれている情景を想像した。

それから数日後、私は四十度を越す高熱を発し、胸部に錐きりを刺しこまれるような激しい痛みにおそわれて病床についた。町医の診断で初期の肺結核である湿性肋膜炎であることがわかり、背部に太い注射針を刺されて大量の胸水をぬきとられた。

その日は、四日間にわたっておこなわれる二学期の期末試験の前日で、むろん試験は受けられず、年が明けた一月中旬になってようやく登校することができた。

学年末の試験は受けたが、二学期末の試験を受けていなかった私は、落第を覚悟したが、幸運にも三学年に進級できた。私の中学校では教室内で、成績の順位によって後列から前列へと席がきめられていたので、むろん、私の席は最前列であった。

学業成績を心配した母は、私に家庭教師をつけることをきめ、母の指示をうけた三兄が、東大法学部三年生の川谷さんという学生を連れてきた。背のひどく高い高知県出身の人であった。

夕方、週に二、三度家に来て、主として英語を教えてくれる。夕食をとって帰ってゆくが、私は母の指示で駅まで送る。

その途中、川谷さんはよく書店に寄り、私のために読むべき書物をえらんでくれ、私も母に金をもらってそれらの本を買った。

私が読書の楽しみを知ったのは、この時からであった。

岩波文庫が多く、古典の『平家物語』『保元物語』『平治物語』『伊勢物語』『雨月物語』『春雨物語』などもあり、

「初めはむずかしく感じるだろうが、日本人が書いたものだから、読んでゆくうちに古文であることも気にならなくなる」

と、川谷さんは言ったが、事実その通りであった。

漱石、鷗外の小説以外にファーブル『昆虫記』、小泉八雲『怪談』、『蘭学事始』などもあり、単行本では創元叢書が多く『木綿以前の事』『考古学入門』が記憶に残っている。『人間の歴史』『火の歴史』『微生物を追う人々』という自然科学の書物も読んだ。

川谷さんは、卒業論文を書かねばならぬという理由で半年ほどで去ったが、私の読書習慣はそのまま残った。

読書によって学業以外に興味深い世界があることに気づいた私は、さまざまなものに関心をいなくようになった。

映画は小学生時代から熱狂していたので、映画館へは相変らず足をむけていたが、寄席にも毎週行くのが習わしになった。

学校の授業が終ると、そのまま上野駅へ行って制帽と肩からさげた鞆かばんを一時携帯品預り所にあずけ、広小路の寄席「鈴木」に入る。昼席なので客は少く、それも大半が老人で、中学生は私だけであった。人形町の末広、神田の立花亭、神楽坂の演舞場などにも行った。

歌舞伎、新派、新劇を観に行くとともに、浅草で軽喜劇を観たり、上野の帝室博物館で美術品を観たりした。それにともなつて芸談、戯曲集、美術書などの書物も買求めるようになった。すでに太平洋上を中心に大規模な戦闘がくりひろげられていた。が、物心ついてから××事変と称する戦争が鎖の環のように連続し、戦争を交替のない日常のものとして感じていた私は、自分なりの楽しみを見出していたのである。

とは言え、近い将来、自分が戦場におもむかねばならぬことは絶えず意識していた。同じクラスの者の中には、海軍兵学校、陸軍士官学校などの軍学校への入学を志している者も多かったが、私には不思議にもそのような気持は全くと言っていいほど欠落していた。肋膜炎の既往症がある私には、基本的にそれらの学校への入学資格はなかったのだが、心情的に規律正しい軍の組織の中にすんで入ることをいとう気持が強かったのだ。なんとなく戦争を傍観しているような後ろめたい気分を日を通して、戦場での死は覚悟していた。

戦時という現実に対する切迫感は淡く、将来、どのような職業につくかを漠然と考えていた。理科系が不得手であったのに造船技師になりたいと思ったり、考古学の本を読んでいたので考古学者になることを夢みたりしていた。少くとも、小説家になるなどは考えもしなかった。

中学校に入ると、クラスで何人か作文のうまい名文家とも言うべき生徒がいて、私は、かれらを羨望の眼でながめていた。

ただ一度、中学二年生の折に、年に一回発行される校内雑誌に『ポートレース』と題する作文が掲載され、驚いたことがある。学校では、東京高師附属中学校と初夏に伝統の対抗ポートレースがあつて、それを観戦した折の印象を作文にしたのである。数年前、学校の同窓会報に、校内雑誌にのつた作文の題と生徒名の一覧表が活字になつていたが、十年先輩の作家の中村真一郎氏や福永武彦氏、八年先輩の国語学者大野晋氏の名もあつた。

作文は国語の教師が受持つていたが、すぐれた作文として私の書いたものを教師が朗読してくれたがあつた。『父の手』という題であつた。

私は、父に抱かれたり手をひかれて歩いたことがなかつた。九男一女の八男である私に、そのようなことをするゆとりがなかつたのかも知れないが、弟にも同様であつた。

私にしてみると、父の皮膚には一度もふれたことがなかつたわけで、それを前提にして父の死について書いた。

父の遺体が棺の中に横たわっている。父の右手の甲に黒い大きなほくろがあり、私は手をおぼして指先でそれにふれた。初めてふれた父の皮膚で、その感触に父というものを感じた、という作文であつた。

教師が朗読してくれたことが嬉しく、家に帰るとそれを母に見せた。母は、居間の長火鉢をはさんで父と茶を飲んでゐた。父は健在であつたのである。

母は可笑しおかしそうに読んでいたが、それを父に渡した。

父は読み進むうちに不機嫌そうな表情になり、読み終えると、

「縁起でもないことを書くな」

と言つて、私に作文を投げるように返した。

怒声を浴びせかけられるかと思つたが、母の笑いに誘われたらしく父も口もとをゆるめていた。

昭和十九年の初夏、すでに授業はなく中学の高学年の生徒は、学徒勤労令で軍需工場で働くようになっていて、私も隅田川河畔にある日本毛皮革という工場で獣皮の皮なめし作業をしていた。薬液にひたした獣皮をとり出し、剪刀でなめすのである。工場の人の話では戦地で防寒衣や飛行服に使用されるということであつた。

午後の作業に入つて間もなく、突然、胸部に呼吸もできぬほどの激しい痛みをおぼえ、さらに体も熱くなって立つていることすらできなくなった。

私は、工場の係の人に症状を話し、許しを得て早退した。痛む胸に両手をあて、身をかがめて都電から国電に乗りつぎ、ようやく家にたどりついた。そのまま横になり、結核専門医の往診を仰ぐと、肋膜炎よりさらに進行した肺浸潤と診断された。

その頃、母は子宮癌の末期にあつて病臥し、家に二人の病人がいることになつた。

一カ月ほど安静にしていた私は、熱も平常にもどり胸痛も消えたので、栃木県奥那須の旭温泉に転地療養のためおもむいた。戦局が最終段階にあつた頃で、まことにのんきなことと

思われるだろうが、東京にいても労働はできず、地方に行った方が少しは食料にも恵まれ、清浄な空気につつまれて恢復する望みもある、と思つたのである。

山の中腹にある宿屋について二日後、豪雨で一日休んだ山歩きの郵便配達の人から「ハハシススグカヘレ チチ」という電報を受取つた。四年間も病臥し、その上、鎮痛のモルヒネ注射を日に何本も打つて中毒状態になっていた母の死に、私は悲しみより深い安堵を感じた。

私は、すぐに山を降り、木炭を動力とするバスで黒磯駅に行つた。その頃、鉄道は兵員と軍需物資の輸送に重点が置かれていて、警察または官公庁の発行する旅行証明書を持つてゐる者のみに乗車券が販売される規則になつていて、それ以外の者には駅で定められたわずかな枚数を売る。私が黒磯駅に行くと、翌日の乗車券を得ようとする長い人の列が出来ていた。私は、しばらくの間、列に並んでためらつていたが、思い切つて駅員室に入り、奥の席に坐つている駅長の前に立つて電報をしめした。それに視線を落した駅長は、うなずくと駅員に命じて上野までの切符を渡してくれた。

家についたのは深夜で、閉ざされた玄関の戸をたたいた。起きてきた次兄の口から、すでに告別式がその日の午後に行つてゐることを告げられた。

私は、骨壺のおさめられた白い布でつまれてゐる箱の前に坐つて合掌し、ふとんにもぐりこんだ。涙は出なかつた。

奥那須へはもどらず、二カ月ほど家ですごした私は、再び工場通いをはじめた。担任の教